

コラム 60ー 三国同盟推進の動機と目的

当時の首相であった近衛文麿は、三国同盟を推進した当事者の動機と目的は何処にあったのかについて、次のような手記を残しています。

「日米関係は悪化し、殊に支那事変以来、両国国交は極度に行き詰った。斯かる形勢では、松岡外相の言う如く、最早礼讓や親善希求のみでは、国交改善の余地はない。歴代の外相、殊に有田、野村両外相は対米交渉で、日米間最大の問題たる支那問題について、了解に達せんと惨憺たる努力を重ねたが何らの効無く、最早米国相手の話し合いによっては、解決は絶望視されるに至った。ここにおいて唯一の打開策は、独伊、さらにソ連と結んで米国を反省させるほか手段がなくなった。すなわち、日独ソの連携も最後の狙いは対米国交調整であり、その結果としての支那事変解決であった。余は、対ソ警戒論者であった。対ソ接近を好まざる余が、日独ソの連携に賛成したのは、これが米国との了解に達する唯一の途と考えられたからのみならず、ソ連の危険は、日独が東西よりソ連を牽制することで、緩和し得ると信じたからである。」

三国同盟に踏み切ったわが国の当事者の真意は、ほぼこのことに尽くされていると思われます。そして、近衛はさらに、「然しながら、昭和 15 年秋に於いて妥当なりし政策も、16 年夏には危険なる政策となった。何となれば独ソ戦勃発で、日独ソ連携の望みは絶たれ、ソ連は否応なしに、英米の陣営に追い込まれてしまったからである」と、国際情勢の変化を憂っています。

また、三国同盟を決定する際に、天皇陛下が近衛に対し「今しばらく独ソの関係を見極めた上で、締結しても遅くはないではないか」と仰せられたことにつき、「陛下の御思慮深きに、今更ながら敬服し奉る」として、ドイツを信じて「早急に事を運んだ不明」を後悔しています。